

令和4年度高島市議会 議会報告会結果報告書

開催日： 令和5年1月26日（木） 午後7時00分～8時30分

目的： 高島市議会基本条例に基づき、市民に開かれた議会を推進するため、市民の皆さんの意見を聞く場として「議会報告会」を開催する。

方法： ZOOMによるオンライン方式による意見交換会

参加者： 「子ども・子育て」事業等に携わっておられる関係者の方々

内容： 全体テーマ：「子ども・子育て」

「未就学児グループ」および「就学児グループ」の2グループに分かれ、各3班ずつの6班編成により、それぞれテーマを設定し、子ども・子育て事業関係者と議会議員との意見交換を行った。

◇未就学児グループ

【テーマ】 ・コロナが発育に与えている影響について
・こども園の運営上の課題、こども園との連携の課題について など

◇就学児グループ

【テーマ】 ・コロナ以降、さまざまな様式の変化で、子どもたちや保護者、指導される方々で、困った事や変わった事について など

◎出席者（42名）

市議会議員 18名

子ども・子育て事業関係者 24名

（子ども園・保育園、PTA、学校、子ども会、学童保育、主任児童委員、保健師、子ども食堂等）

①未就学児グループ

【コロナが発育に与えている影響について】

(保護者)

- ・地域との交流機会が減少した。
- ・保護者会の活動がコロナで自粛されていたが、保護者と子どもと一緒に活動できるように取り組むようになった。(桜の花びらを作って園内に貼ったり、準備体操を動画で撮ってYouTubeにアップするなど。) →共働きの保護者が増え、忙しさで気持ちの余裕がない印象があるので、親子の取り組みは良いと思う。

(その他)

- ・お父さんの育児参加が8年前くらいから増えた。企業の育休取得が少しずつ進んできているようだ。園の草刈りや健診、妊婦教室の参加者でお父さんの申し込みが増え、お手伝いではなく、主体的にしている。その様子を子どもが見て育っているのは昔と違う。
- ・夫婦ともに子育てができる家庭がある一方で、ネグレクトのように子育て格差がある。

(園)

- ・マスク着用により、言語の発達や酸素不足による脳への悪影響があると言われている。現時点ではマスク着用でコミュニケーション能力の低下や、表情の発育に影響があるとは感じていない。表現はしにくいですが、目での表情や身振り手振り、声のトーンの変え方でコミュニケーションがとれている。マスクをしていないであろう家庭でコミュニケーションの充実を望むし、コミュニケーションがとれていると思う。
- ・マスクなしの先生の顔を見て泣く子どもさんもいることから、マスクなしの先生の写真を名札につける工夫をしている。
- ・マスクのメリットとデメリットは一概には言いにくい。選べるようにすることも1つの方法と考えられる。
- ・5類になることについて、子どもたちはすぐに順応できるのではないかと思う。コロナで縮小した活動についてはどう戻していくのか、不要で戻さなくてもいい活動もあるのかなど今後判断していく必要がある。

(保健師)

- ・親子関係に変化はないと思われる。
- ・人と会う機会が減ったからか、人見知りする子が以前より多い印象がある。
- ・コロナ禍以前から外で遊ぶ子どもが少なくなっている状態がさらに進んで習慣化することや、人とやりとりをする力が落ちることを心配している。
- ・おうち時間が増え、おやつや甘い飲み物を摂る回数が増えているようで、虫歯が増えないか心配。→健康推進課で健診や離乳食教室で指導している。

(主任児童委員)

- ・あかちゃん訪問については、中断や、玄関先での対面となった期間もある。
- ・今は赤ちゃんと接する機会が戻りつつあるが、若手保健師が現場経験を積む機会も減った。
- ・3か月の乳児の母親の悩みに睡眠がとれないことなどがあるので、専門家へとつなげるようにしている。保護者の方々には、赤ちゃん訪問や保健師の活動を通して、コロナ禍の中でも人とのつながりがあるのを実感してもらうことによって、安心感につなげることができた。子どもが生まれた嬉しさを一緒に喜ぶことや、安心感を与えることを大切にしている。
- ・妊婦や乳幼児の母親は、外出したり家に来てもらったりすることが怖いため、孤独になることが多く、不安や負担が増えて、しんどさを抱えてきたと思われる。
- ・離乳食教室はオンラインより直接話が聞きたい要望があり、変更した。お母さん同士、オンラインより直接会って話すことを望まれているようだ。

(こども食堂)

- ・市内で10か所あるこども食堂ではテイクアウトになり、一緒に遊べずに残念。コロナ禍で小規模になり、子どもだけではなく孤食されている大人にとっても大切な場所だが、高齢者の方の交流が減少した。貧困状況の把握は難しいが、参加人数は徐々に戻りつつある。

(その他)

- ・スキンシップを取ろうとする子どもが以前より増えた感じがある。
- ・メディアの視聴時間が多くなったアンケート結果が出ている。(テレビではなく、スマホ)
- ・LINEで情報交換され、子どもの写真や動画を送っているようだが、情報交換には悪口ではないがそれに近いものがあり、良し悪しがある。
- ・結びと育ちの応援団での子育て講座の参加者が減少し、オンラインで行っている。お母さん同士の集まりが少なくなったようだ。インターネットの情報収集が苦手な方もおられ、情報格差が生じていると感じる。少し話せば気が晴れるのだが、そのような場がなくなったと言われる方もある。

【こども園の運営上の課題、こども園との連携の課題について】

(保育士不足)

- ・保育士不足が続いている。低年齢児の入園が増え、待機児童が増えた。入りたいところに入園できないこともある。
- ・行政が人探しをかなりしてくれている。
- ・保育士の紹介会社が頻繁に求職者の案内をくれるが、紹介料が年収の30%という状態で、紹介された方を雇うのがなかなか難しい。今まで新卒は大学、短大に求人を出していたが、それもなくなり、紹介会社からのみになっている。

- ・ 学生がスマホで紹介会社に登録しているようだ。ほかの県内の市では、紹介料の補助があるようなので、高島市でもあったらいいなと思う。
- ・ 高島市出身の人が、給与や待遇の良い大津市や京都へ就職してってしまう。
- ・ 感染に気を付けることで保育士に負担がかかっている。0～1歳児担当の保育士が全員休むと、負担はかなり大きい。
- ・ 消毒作業など感染症対策の業務が増え、人員が必要であり、資格がなくても補助者として手伝ってもらう方をお願いしている。シルバー人材派遣センターや「さんさん」などとの連携をしている。引き続き支援が必要。
- ・ 就職フェアや協議会との連携での求人などがなされている。人材バンクを活用すべきではないかと思う。
- ・ 人数が多いように見えても、短時間勤務の方が多いので、早朝や延長保育の時間帯は手薄になる。また、地域差が大きい。
- ・ さまざまな職種の方が保育にあたられることについては、保育の低下とならないか、また、保育する方々の間で意思疎通ができにくくならないかという不安は少しある。

(園の工夫)

- ・ 子どもには人との関わりが必要であるため、保育園や児童館では入場制限や2部制にするなどの工夫によって、各行事や活動を何とか継続することができた。今後、自分が受け止めてくれる安心感を子どもが気付いてもらえるような保育の組み立てをしていきたい。
- ・ 行事を中止して子どもだけで行ったり、お泊り保育の代わりに料理やキャンプファイヤー、親子バス遠足を行ったりした。
- ・ コロナ禍の前は、地域の方に行事の案内を出したり、デイサービスや老人ホームを訪問したりしていた。(今はできていない。)

(園と行政の連携)

- ・ 園と行政との連携はできている。心配のあるお子さんがおられれば園まで様子を見に来てくれる。
- ・ 行政は、研修を行ってくれたり、園訪問で先生方の悩みを聞いてくれたりしている。メールとも連携し、きめ細やかに様子を見てもらって、アドバイスを受けている。

(あかちゃん訪問)

- ・ あかちゃん訪問をしていると、コロナの不安で外出しづらく、支援センターやつどいの広場、ハグナビを知っていても行きにくいようだ。プチ不安を身近に相談できるようになると思うが、言える場に行けない。
- ・ ちょっとだけ子どもをみてもらいたい時はファミサポを知らせるなどしている。住んでいる地域は良い所だと思ってもらいたい。
- ・ 子育ての不安や悩みがある時、人に直接言うのではなく、ネットに頼るケースが多くなっている。そこで煮詰まってしまうこともある。もっと人に頼ったり、聞いたりしてもらいたい。情報共有して不安を支え、一緒に考えて必

要なところにつなげていければと思う。そのために、家庭訪問や保健師のアウトリーチが必要。

- ・図書館の「ちくたく」で0歳児さんの身近な先輩ママと話す場がある。発信できない方には個別訪問で対応。

【収入があがれば保育士不足解消につながるのかについて】

- ・あがるにこしたことはないが、大津市にはかなわない。交通のハンデもある。市内には短大がなくて、京阪神へ学びに行ってもそのままになってしまう。
- ・給料があがればモチベーションはあがる。責任感が必要で、何でもいいからというので就く職業ではないと思う。
- ・中高でキャリア教育をしてくれている。市全体の問題と捉えることが大切だと思う。
- ・ソフト・ハードの両面で支えてやりがいや気持ちを育てることが大切。
- ・子育てしながら働ける環境作りが必要。高島が好きという心を育てることが大切で、市としての魅力、働くことが楽しいと思えるような職場作りをしていかないとと思う。

【コロナ禍によって気づいたことや得たものについて】

- ・今までやってきたことの意味を見直し、感染防止対策をしながら、形を変えてでも実施できる工夫ができるようになった。
- ・本当に大切な保育活動とは何かを考えるきっかけになり、さらに良い教育や保育につながることを期待される。
- ・学校と園の社会的な役割の大きさを再認識した。
- ・親が子どもと一緒にいる時間が増えた。
- ・妊婦教室の参加者が増えるなど、保護者の保育、教育への関心もかえって大きくなっているように感じる。
- ・リモートのメリットを発見するなど、デジタル化も進んだ。

【その他】

- ・幼年時の障がいの有無がわかるタイミングについて、その障がいの様子により、園でわかる時もあるれば、就学後にわかる時もある。
- ・園児が少ないので以前から縦割り。異年齢を生かして地域とのつながりも大切にしている。

②就学児グループ

【コロナ以降、さまざまな様式の変化で、子どもたちや保護者、指導される方々で、困った事や変わった事について】

(子ども会)

- ・人数が減って、団体スポーツなどが出来ない。
- ・昔のような遊びが無くなっていった。
- ・便利な世の中になり、体力は落ちている。
- ・体力や筋力は低下していたが、コロナピークより少し上がってきている感じがする。
- ・新興住宅地のご自宅に学校からの情報が入っていないようだ。(子どもがお知らせを届けられていないかもしれない。)

(学校)

- ・学校においても、黙食やマスク着用で子ども同士、地域の方々との関わりも様々な制限があった。
- ・給食は黙食になっているなど、これまでと比較して大きな転換点と感じている。
- ・ご飯を食べながら話が出来ない。コミュニケーションが取れない。会話が進まない。打ち解けられない。本来の意味でのコミュニケーションが激減している。密着する子どもらしさ持てず、今後は心配。
- ・コロナ感染流行初期は、課外活動等においても困り事があったが、感染拡大の繰り返しで、慣れも出てきた。
- ・タブレット端末学習、オンライン学習など価値観の変化、時代の変革期、選択肢を増やし、多様なサービス提供する機会に。
- ・学校内で話さない、歌わないなどの制限があり、家でやってくださいと伝えられているが、「おとなしくなった」「こじんまりとまとまっている」など補いきれない部分を感じている。
- ・学校ではコロナ禍で失われてきた教育を読書で補うよう推奨していて、図書の貸し出しは増えた。読書の推進やさまざまな道具をうまく活用して子どもたちの成長を促すように取り組みをしている。
- ・コロナ感染流行初期、何が正しいか不明、手探り状態。学校行事の在り方を見直し、子どもファースト視点で考えるきっかけに。
- ・タブレットやスマホをどういう風に、上手く共有、活用していくかが課題。
- ・タブレットなど、集中力は上がっている。
- ・いじめはなさそうだが、スマホを持っていない子が仲間はずれにあうようだ。
- ・持久力、我慢強さ、辛抱強さが低下している
- ・マスクをしている分、友だちの話や表情をしっかりと読み取ろうと寄り添ったコミュニケーション能力が見られる。
- ・男女間の差別がなく、個々を分り合い助け合っている。
- ・イベントや行事が減ったり時間が短縮されたりしている中、一つ一つの行事

を大切に、凝縮して思いの詰まった内容になってきた。また、一番大切と思われる事を優先して実行していくようになった。

(PTA)

- ・ 経済的な困窮がどの家庭にあるかまでは把握していないが、物を買うのを少なくし、教材の必要性を精査、制服や文具のリユース交換会をPTAと協力して開催した。
- ・ 親子の距離感において、スマホによってコミュニケーションが少し取りにくくなった。スマホを介して、いろいろやり取りの機会はある。親が変化について行っていない。→子どもたちが自分で責任、判断がとれるようになってほしい。
- ・ プロセスや手段が多様化している中、子どもの主体性を大切に、どう応援していくかが課題。
- ・ 親の方が心配して騒いでいたが、子どもの方が変化に柔軟に対応して行っており、親が子どもに教えてもらう側に。
- ・ 集会など、無駄な集まりがなくなり、新しい会議の進め方などで新しい人も入りやすくなった。
- ・ もともと単位子ども会の活動が減ってきていた中、コロナも重なり、より活動が減ってしまった。
- ・ 友達の家へ遊びに行けない、家にひきこもりゲームで遊ぶことが増える。コミュニケーションが苦手な子が増え、「笑顔で元気よくあいさつ」をPTA全体で取り組む。

(課題等)

- ・ 「普通」が難しい。いろんな子がいる。様々な背景。個別最適な学びの提供。教員だけでは難しい、地域の協力が必要。
- ・ コロナ禍、マイナス面多いが良い面も多々ある。ポジティブに考える事にする。ネガティブに考えると心配事も増えるので。
- ・ 「コロナ世代」いい意味で捉えられるように、地域でも学校でも、前向きにできる事を考えていきたい。
- ・ 高島の良さ、自然から学ぶ、自然にふれあう遊びなどを高島の教育に。
- ・ 認知する、人と繋がる、思いやる、・・・こうした事を学ぶ機会がない。
- ・ 制限の中での育ちをどう保証するか。
- ・ 思春期の活発さが無い。制限なしにはしゃいでほしい。
- ・ コロナ禍でさまざまな活動に制約がある中で、子どもへの体力、コミュニケーション力、活発さなどさまざまな面で影響も感じている。
- ・ 昔と違い子どもの数に対して大人が多いので「見守り」が「監視」になっていないか、子どもらしさを失わせることにならないかは気をつけることが必要。
- ・ 長い時間ゲームをしていて、発達への影響が心配 (PTA)
- ・ 大人が「危ない」など子どもたちの行動に制限をかけすぎていないか、注意

をすることが大切。(PTA)

- ・タブレットなども便利で良い面もあるので、科学的根拠に基づいて成長を妨げないようにうまく活用していくことが大切 (PTA)
- ・サロンなどでの幅広い世代での交流もできなくなっている。
- ・マスクで表情がわからなくなったので不安などの把握が難しい。(主任児童委員)
- ・主任児童委員として、引き継ぎを受けた時とは全く違う状況に難しさを感じている。
- ・児童館でのおもちゃ病院などは、子どものおもちゃが直った感動も良い体験。こういう機会を通した成長の機会を多くしたい (主任児童委員)

【対策と感想】

- ・コロナ禍で活動が縮小されていた為、体力や免疫を落とさないよう、高島の自然を生かした遊びや学び(山登りやスポーツを楽しむ等)を、充実させて行く事が大切。
- ・デジタル社会が進んでいく世の中で、子どもたちの未来のシゴトに、何が必要かを、大人の価値観だけでなく、子どもたちの発想、視点を大切に育んでいきたい。
- ・時代の変化により、子どもたちはその時代をそのまま生きていて、大人が思うより、今の時代を自分達らしく生きている様子をうかがえた。
- ・心配、先回りして色々段取りを大人が考えるのでは無く、子どもたちが描く未来への意見や思いをしっかりと聞きたいと思った。

【まとめ】

コロナ禍の中で、議会報告会の開催を模索した結果、オンラインにより実施しました。初の試みでしたが、「子ども・子育て」をテーマに、子育て事業関係者24名の方々と市議会議員18名、計42名が6グループに分かれ、各グループにおいて活発な意見交換等がなされました。

コロナが発育に与えている影響や、コロナ以降、さまざまな様式の変化で困ったことや変わったことなど、それぞれの現場で感じておられることや、現状や課題などをお聴かせいただきました。参加いただいた関係者、団体、それぞれのお立場で、地域の子育てにご尽力いただいていることに感謝します。

各議員、市議会として皆様から寄せられた貴重なご意見をもとに、今後より良い政策へと結びつけられるよう調査、研究を進めてまいります。